

瀬良英介の一般業界向け

飼料・畜産トピックス（197）

2008年12月

### （197）これからの家禽産業面での栄養

カナダのゲルフ大学のリーソン教授（Pfof. S. Leeson）は家禽栄養学や家禽飼料学の分野では世界の中でも高名な学者として知られています。私の見方かもしれませんが、高名な理由の一つには実践的な面を考慮した研究が数多くあるということでしょう。

リーソン教授が単独で発表した今年の論文の中にコマーシャル養鶏栄養についての予測を主題にしたものがあります。今後の日本の養鶏・飼料産業にとっても有意義な示唆が多いと思いますので、論文の終わりに書いておられる要点について御紹介します。

（1）西暦2015年までに世界中の養鶏産業は2億トンに近い飼料を必要としますが、それに使われる原料にはただの12種類の原料が主な飼料原料として使われる。

（2）新しく構築されるであろう養豚産業が養鶏産業にとってのグローバルな主競合相手としてとうもろこし、大豆、及び、油脂原料の調達で競うことになる。

（3）クリーンな水の充分、且つ、経済的な供給が養鶏生産と鶏肉処理産業に制限因子としてのしかかってくる。

（4）単位当たりの生産、或いは、維持に関しての栄養要求は過去50年にわたりとてつもなく変わってはいない。飼料スペックと飼料プログラムは変わった。マーケットのニーズに合わせてそれらは進化し続ける。

（5）産卵鶏とブロイラー双方とも正確にエネルギーの要求に対して飼料を摂取する。そして、この事実は異なる栄養密度の飼料を与えるという利点として使える。

（6）ニッチ・マーケットに対して付加価値をつけた鶏肉や鶏卵生産は新しい飼料原料の利用を増大する。

（7）代謝障害、特に、カルシウム代謝に関する部分が将来の産卵鶏、ブロイラー、七面鳥の生産性に恐らく制限を加えることになる。

（8）肉用鶏飼料から抗生物質を除外するにあたっては緊急課題として開発しなくてはならないことがある。それは飼料原料の利用、栄養濃度、及び、腸管内細菌数のダイナミクスに関する相互作用を速やかに、然も、より良く理解することである。

（9）養鶏飼料産業は、今後、益々厳しくなる政府の規制に応じるためにも飼料のリアルタイム分析を導入する必要に迫られる。そこからの情報はフード・チェーンの中での養鶏生産物のトレーサビリティや責任所在などの面で貢献する。

前述の9項目はリーソン教授が論文の終わりで指摘していることです。どれ一つとっても小さな課題ではありません。本論は8ページからなる論文で、図表はありません。論文自体に関心のある方は米国家禽学会の学会誌の一つである(2008 J. Appl. Poult. Res. 17:315-322)をお読みになることをお勧めします。

余談ですが、指摘されている9項目についてのいくつかは日本でもすでに始まっています。然し、将来はまだ変わっていくでしょう。私は食の安全という面から今後の日本でもまだまだ進むことは間違いないと思います。然し、リーソン教授が指摘している各々の事柄、特に9番目の項目についての背景と意味の深さが日本の業界、特に、消費者層が「理解し感じて捉えていくであろう内容」との間にはかなりの違いが生じると思います。あまりにも初めから微にいり細にわたって追求していくことは、最終的に枝葉末節な点が重要であると考え、誤った道を深追いすることになります。それは、日本の養鶏・飼料産業のみならず最終的には消費者全般のためにも有益なことではなくなるでしょう(瀬良、2008)。